闇の中の哄笑

半村　良

角川文庫

昭和五十四年十月三十日　初版発行

定価は、カバーに明記してあります

角川文庫

闇の中の哄笑

著作者　半村良

発行者　角川春樹

印刷者　村沢達弘
東京都港区新橋四ノ三十ノ八

発行所　株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二ノ十三
〒一〇二　東京③一九五二〇八
電話東京(263)七二一(大代表)

落丁・乱丁本はお取替えいたします

Printed in Japan　旭印刷・多摩文庫

0193-137519-0946(0)

闇の中の哄笑（こうしょう）

半村　良

角川文庫

4296

目次

第1章　闇の中の出発　五
第2章　闇の中の通信　四一
第3章　闇の中の抱擁　七六
第4章　闇の中の謀略　一三〇
第5章　闇の中の約束　一六〇
第6章　闇の中の断崖　一九八
第7章　闇の中の殺人　二三四
第8章　闇の中の哄笑　二七二
解説　権田萬治　二七七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

第1章　闇の中の出発

1

東京・渋谷・道玄坂二丁目。

地下二階から七階まで、飲食店がぎっしりとつまったビルの二階に〈新かわ〉という料理屋がある。活魚料理が専門で、ひとけのなくなった店内は、壁際の水槽の中を泳ぐ魚たちの動きだけがばかに目立っている。

「徳さん、灯り消して」

奥で女の声がすると、二、三秒してから店内の照明が一度に消え、暗い中をゴトン、ゴトンと井の頭線の電車の響きが鈍く伝わって来る。

調理場のほうの照明はまだしらじらとついている。白タイルとステンレスずくめの、案外清潔な調理場である。一番奥の大きな冷蔵庫のかげが、畳を二枚敷いた小間になっていて、よく陽に焼けた引き締った体つきの男が、そこでブルーのスラックスをはいているところだった。男は白いベルトをしめる。

「徳さん、あんた本当に行く気……」

紺の紗に銀色がかった夏帯をした中年の女が、その男のほうをちらりと見て言う。左手に伝票の束を持ち、右手の人差指と中指の間にセブン・スターをはさんでいる。

「ええ」

「そりゃ、もともとお休みの番なんだしさ、行くのは構わないけど、ゴルフもやらないのにそんなとこへ行ったって面白くないでしょうに」

ちょっと肥り気味で、帯のしめかたもいかにも着慣れた風にゆる目であった。貫禄からおしても、この店のおかみに違いない。

「勉強すよ、勉強」

徳さんと呼ばれた男は、乾いたタオルで上半身を拭い、白いポロシャツを着る。髪は短い。陽焼けした顔にもたるみはなく、精悍な感じだ。

「板前だってたまには洋食も食いたいすよ。それに、そういうとこで出す和食がどういうものか、見てみたいす」

おかみはセブン・スターを吸い、煙草を口から離して首を軽く横に振って見せる。

「商売熱心だね、あんたも」

「料理が好きなんす」

徳さんは小間をおり、ビニール製の雪駄まがいの草履を突っかけた。

「あんたが真面目ならあたしは助かるけどさ、昌ちゃんとのこと、いいかげんにふん切りつけたらどうなの」
「世帯持つの、何だか怕いす」
「何言ってんだろうね、いい男が」
おかみは失笑した。
「面倒なんすよ」
徳さんも自嘲するように笑う。
「あんた、どうでもいいけど、そのホテル、大層な格式だってじゃないの。そんなとこで、いつもみたい喋りかたすると、ばかにされちゃうわよ」
「そうすかね」
「それよ。そうすかね、面倒なんす……」
おかみは徳さんの口真似をした。
「すぐにお里が知れちゃうわよ」
「金払えば客じゃないすか。気どることないす」
「でもさ、そんなとこで徳さんが甘く見られたら、あたしだって癪だもの」
「俺、一人で行くから」
おかみは大げさに徳さんをぶつ真似をした。

「あたしがついてくわけないでしょ」
徳さんは肩をすくめた。
「ちゃんと背広着て行くす。常川さんに言われてるし」
「でも、勿体ないねえ」
「どうして……」
「だってそれ、二人部屋でしょ。ツインて奴」
「ええ」
「昌ちゃんを連れてってやったらいいのに」
徳さんはそっぽを向いた。おかみは焦れったそうにその精悍な横顔をみつめる。いわゆる、苦みばしった好い男という奴だ。腕がよくて人間が堅いと来ている。おかみだって、もうちょっと若ければ放っとかない、と思っているようだ。
その徳さんこと天田徳三をひいきにしている常川という客が、今夜急に伊豆のホテルへかわりに行かないかと言い出したのである。ゴルフ場があって海のそばで、歴史も古く格式の高いホテルだそうだから、普通ではなかなか泊れないらしい。常川は予約してあったのだが急に行かれなくなり、お盆休みのかわりに明日から店を休む徳さんを泊めてやろうと思い立ったようだ。勿論費用は常川が持つ。徳さんは常川が板前としての自分に見学させてやろうという好意を素直に受取って、有難くその申出を受けることにしたのである。

2

幌をかけたトラックが一台、まだネオンの消えやらぬ街を走り抜け、ゲートの前でとまった。海上自衛隊の制服を着た男が、そのトラックの運転席をみあげてふたことみこと言葉を交わすと、ドアをあけて中へ入った。トラックはすぐにゲートを通過する。階級章は金筋一本に桜がひとつ。三等海尉だった。

いれ違いにゲートを出るところだった二等海士が二人、足をとめてそのトラックを見送る。

「何だろう」

小首を傾げ合い、すぐ午前零時の街路へ出て行った。トラックは陸上自衛隊のものだった。

トラックは構内へ入って急にスピードを落し、ゆっくりと奥へ進んで行く。遠くで、カーンと鉄板を打ちつける音がひとつ、静かな夜気を震わせた。

幌の中には逞しい男たちが、黙然と揺られている。とりたてて緊張した様子もないが、無言の彼らには一種の威圧感が備わっている。火器を持たせれば今にもトラックから飛びだして、あたりに死を撒き散らしそうだ。充分すぎるほどそういう技術を叩き込まれた精鋭、という感じである。

ただし、全員火器は携帯していない。そのかわり、よく見ると足もとに何やら工具らしいものをつめた袋を置いている。どこから来た連中か、はっきりしないが、海上自衛隊の基地へ陸上の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

部隊が、しかもこの夜ふけに人目をはばかるように入って来たのだから、何かいわくがなくてはおかしいだろう。

トラックは奥まった一画にある工場らしい大きな建物のそばでとまる。浮標の下におろす巨大な錨が柵で囲った芝生の中に点々ところがっている。

ドアをあけて三等海尉がまずトラックをおり、ひとけのないコンクリートの道に靴音をたてて海のほうへ遠のいて行く。

「乗船の前に計量がある。先がつかえるから、二人ずつギャングウェイを渡れ」

幌の中でそんな声がする。ギャングウェイはギャングウェイ・ラダーの略だ。昔風に言うとタラップのことである。

運転席では三等海尉が去ったほうをじっと見ている。汐風がどこかで断続的に鋭い風音をたてていた。

小さな灯りが明滅した。運転席の男がそれを確認すると、今度は反対方向に人影がないことをたしかめてから、ピー、と短く警笛を鳴らす。とたんに後部の幌がはねあがり、底の厚い頑丈な靴をはいた兵士たちが、その靴の音もさせずに海へ向かってさっと走りはじめた。

先頭の男が右手をあげると、二十名の兵はピタリと動きをとめる。八メートルほど先は海だ。ひたひたと波の音がしている。そして、その波の上に、まっ黒いものがうずくまっている。

潜水艦であった。ずんぐりと丸っこくて、水の上へ出ている部分が少ない。まるで鯨だ。

鯨の背中へ、二人ずつ、二人ずつ、兵士が素早く渡って行く。背中に丸く口をあけたハッチから光がもれている。ハッチのそばにも小さな灯りがある。兵士は荷物のある者は荷物を手に、その小さな灯りのそばで計量し、するりと丸い穴の中へ吸い込まれて行く。計量した数字を書き留めているのは潜水艦の乗員だろう。

ハッチは垂直な丸い穴で、白く光る鉄梯子が三層下まで続いている。二十名の陸兵がその穴へ吸い込まれると、急に機関音がたかまる。

「あの辺は漁船がたくさんでている」

発令所で艦長がひとりごとのように言う。

「厄介ですね」

白い帽子をかぶった小柄な青年がそう言って健康そうな白い歯を見せる。

「ま、近い所だしな」

艦長も含め、発令所の男たちはなごやかにやっているらしい。ひとクラス下の相手と練習試合をするバスケットボールのチームの控え室のような雰囲気だ。

黒い潜水艦の向こうに、灰色に塗った大きな米艦が側面を見せている。第二次大戦中の艦にくらべると、舷側がばかに高く、力まかせに鉄板をうちつけたビルが浮かんでいるように思える。

潜水艦はのっそりと動きはじめた。最初から半分以上水の中に潜っているから、出港の勇壮感など皆無で、そのかわり忍者が動き出したような物々しさが漂う。

それでも航跡は白い。が、それもすぐ闇に消され、黒い潜水艦は夜に紛れて見えなくなった。陸兵を案内して来た三等海尉が、コツコツと靴を鳴らしてトラックのほうへ戻り、無人になった幌の中をチェックしてから、ゲートのほうへ帰って行った。

3

小林貞夫は六本木のクラブのピアノのそばの席に陣どって、二人の女を相手にブランデーを飲んでいた。小林は中どころの建設会社の資材課の課長補佐だが、いろいろと役得があってなかなか遊びっぷりがいい。三十四で独身だから、ホステス稼業から足を洗いたがっている女たちにとっては、恰好の標的となる。

「だめよ、あの子なんかに引っかかっちゃ」

たしなめるというより、嘲笑するように女の一人が言う。二人とも銀座のクラブがおわってから小林について来たホステスで、どちらも美人だ。

「そうかい」

「特攻隊よ、あれは」

もう一人が笑う。黒服蝶タイの男が、そのテーブルの脇に膝をついて、笑う女のグラスに氷をいれていた。

「何か食うか」

小林が言うと女たちは首を横に振る。
「とにかくコバちゃんはうまいんだから」
「何が」
「やり方よ。どこかに彼女がいるはずなんだけど、絶対に尻っ尾をつかませないんだから」
「おいおい」
小林は苦笑して見せる。
「名探偵の妙子にそう言われるのは光栄の至りだがね。別にいやしないよ」
「嘘」
妙子という女はテーブルの上へ体を乗り出すようにして言う。
「いるわよ、絶対に」
「じゃあ誰だよ、言ってみな」
すると妙子は急に声をあげて笑う。
「言っていいの。あたしには一人だけ判ってるんだけど」
小林は煙草に火をつけて表情をかくす。
「ねえ篠子、いつからなのよ」
篠子という女は大きな目をしばたたいて見せる。
「かくさなくてもいいの」

妙子は篠子の肩を叩く。
「あたしは味方よ。そのあたしにまでかくしてたっていうのはちょっと気に入らないけど、とにかく気をつけなさいよ。あたしの勘じゃまだいるみたい」
篠子はあいまいに微笑する。妙子は、
「ちょっと」
と言って席を立ち、トイレのほうへ向かう。
「嫌なこと言うわね」
篠子は細い眉を寄せた。
「気にするな」
小林は低い声で短く言い、ブランデーを飲んだ。
「でも、名探偵って言われるだけあって、彼女の勘は凄いのよ」
篠子は疑わしそうに小林を見た。
「疑うなら勝手に疑えばいい」
小林は冷静な言い方をした。
「疑うわけじゃないけど、嫌よ、変な子にひっかかっちゃ。あの子が何で特攻隊って言われてるか判ってる……」
「知ってるさ。しかし、古めかしい言葉がはやるもんだな」

「もしそんなことをしたらあなたが笑われるんですからね」
「判ってるよ」
「ねえ、あしたからどこへ行くの」
「ゴルフだよ。得意先との付合いだ」
「金曜よ、あしたは」
「ああ」
「一泊するんでしょう。土曜日はお休みじゃないの」
「だから金曜日にきまったんだ。先方だってサラリーマンだ、ウイークデーに泊りがけでゴルフに行けるか」
「本当にゴルフなの……」
「いいかげんにしろ、ばか」
「じゃ、日曜日は帰ってるのね」
「ああ」
「日曜にあなたのマンションへ行っていい……」
小林は鬱陶しそうな表情を泛べて篠子を見た。
「いいよ」
「だって、もう二週間も放ったらかされてるんだもの」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton